

【小学1年生・2年生】

特選

わたしのすきなばしよ

亀山小学校1年

田中 智悠

いまわたしががんばっていること
すいみんぐ
つめたくてきもちいいな
わたしはいませおよぎを
れんしゅうしているよ
うかぶのがむずかしいけど
がんばっているよ
もつとじょうずになりたいな
みずのなかにもぐるとしんど
しているよ
だれのこえもきこえないよ
だからみずのながすきだよ

(評)

水のなかは、ほんとうにふしぎですね。
プールでじょうずにおよげるうれしさと、水
の中のシーンとしたときの感動がよく書かれて
いると思います。とくに詩のだいめいがいいで
すね。

(彦根文芸協会 西村 和野)



準特選

どんぐりをひろったよ

城南小学校1年

西堀 航生

どんぐりをひろったよ
おとうさんに見せたら
すごいなあ!!
おかあさんに見せたら
どこでひろってきたん?
おねえちゃんに見せたら
めっちゃあるやん!!
あかねちゃんに見せたら
あっ!!
というだろうな

(評)

小さなどんぐりを見せた時のおうちのひと
りひとりのよろこびのことばが、生き生きとか
かれていて、たのしい詩になっていますね。よ
くかんさつしていて、すばらしいと思います。
おうちのみなさんのあたたかさが伝わってきま
す。

(彦根文芸協会 西村 和野)

佳作

あきのかげ

城東小学校2年

三須 有乃佳

まっかなもみじは いつもかげでとんでゆく
きょうもいっしょに とんでゆく
みんなといっしょにとんでいく
もみじはかげでとべるんだ
おちばといっしょにとんでゆく
風といっしょにとんでゆく
はっぱもさわさわおどるんだ
木もさわさわおれちゃうぞ
ゆれる ゆれる ぐらぐらだ
どんぐりころころ ころがるぞ
くりはおちる おちる からだがいたいなあ
かげはおもしろいな

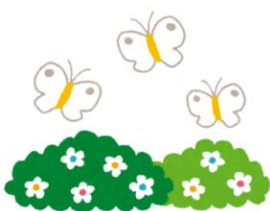
入選

ちようちよ

若葉小学校2年

松澤 春華

ちようちよがのはらをとんでいる
のはらをびよんびよことんでいる
花にとまってひと休み
ちようちよが一ぴきとんできた
ちようちよは二ひきでおどってる
かわらの方へとんでった
川べの石でひと休み
あつはねに水がついちやった
はねがぬれてかわいそう
そのあとのはらにとんでった
またまたのはらであそんでる
びよんびよこびよんびよこあそんでる



【小学3年生・4年生】

特 選

お月見

金城小学校3年

山本 真央

まん月の夜

すすきとおだんごをそなえて

弟とお月見をした

「月の中にいるのはライオンだよ」

と弟が言った

「えー うさぎじゃないの？」

と私は言った

でも もしかしたら ほかの動物かも

しれないなあ

私は弟と考えた

「カメさんかな？」

「ゾウさんかも」

「もしかしたら ヘビさんかも！」

と弟が言った

「ヘビは手がないから もちつきできないよ」

私は弟とわらった

月の中にいるのは 一体何の動物なのだろうか

(評)

お月見をしながら、月に住むかも知れない動物について、作者と弟のつきつきと夢をふくらませていく会話が、むだな言葉なく軽快に楽しく表現されています。二人の笑い声まで聞こえてきそうです。大切な言葉だけを残して、無駄な言葉をはぶくと、作者の思いは、いっそう強く伝わります。

(彦根文芸協会 谷口 明美)



準特選

本をひらく

城東小学校4年

松井 杏樹

本をひらくと自分は

本の波にさらわれてしまう

本の波にさらわれて

かならずどこかに着く

それは 自分が

主人公になるからだ

人を助けたりぼうけんしたり

みんなひつしになる

波にさらわれたとき

初めて本を好きになる

大好きになる

その本をずっと大事にするようになる

本は人生を変えるものでもある

みんなきつと本を好きになる

(評)

「本をひらくと、本の波にさらわれてしまう」という作者の気持ちと言葉の表現に、心を奪われまされた。読書の価値や「本にさらわれた」時の思いなどが、率直に深い言葉で表わされていて、作者の生き方まで感じとれ、作者と本の強いつながりが伝わってきます。

(彦根文芸協会 谷口 明美)

佳作

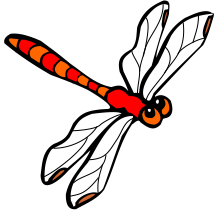
秋の色

鳥居本小学校 4年

岩 噌

歎 太

赤とんぼが
 ひがん花にきいた
 なぜぼくは
 赤色なの
 とんぼの色は
 秋の色
 ひがん花は
 静かに答えた



佳作

テストで変わるお姉ちゃん

城東小学校 4年

川 島

久 瑠 美

わたしのお姉ちゃん テストで変わる
 テストがいいとお姉ちゃんにこにこ
 テストがいいとお姉ちゃん気げんいい
 テストがいいとお姉ちゃんからかってくる
 わたしのお姉ちゃん テストで変わる
 テストが悪いとお姉ちゃんプンプン
 テストが悪いとお姉ちゃん気げん悪い
 テストが悪いとお姉ちゃん
 勉強たくさんやっている
 わたしのお姉ちゃんテストで変わる
 テストがいいと相手するのが
 めんどくさい
 テストが悪いといやなこと
 いわれる
 あっあーあ 現実だった

佳作

はらっぱの顔

城東小学校 4年

河 分

小 春

雨のふったあとのはらっぱ
 きらきらひかり
 太陽が出て晴れの日はらっぱは
 ぴんぴん元気
 くもっていてうす暗い日はらっぱは
 ゆったりしてる
 いつもちがう顔があつて
 ころころかわつて
 おもしろい

詩
入 選

ブランコ

城東小学校 4年

北 沢 茉 結

ブランコが ゆれる
秋風に ゆれる
だれものつてないブランコに
秋風が一人
ブランコにのる
ブランコは キーキーおとをたてて
秋風にのられてる
あつ
ゆきがふってきた
秋風はブランコからおりて
どこかへきえていった

入 選

かくれんぼ

城東小学校 4年

東 川 拓 翔

朝目がさめた
だれかがぼくをよんでいる
だれだ
まどの外をながめても
だれもない
どこにもいない
でもやっぱりだれかの声がする
「あそぼう」と
いつのまにか
かくれんぼのオニになった
まだみつからない
「ミンミンミン」
せみのかち

入 選

わたしの全勝

亀山小学校 3年

田 中 美 結

わたしと妹はいつもけんかばかり
朝おきたら第一し合のはじまりだ
ピー
はじめのこうげきはわたし
「ひじついで食べたらおぎようぎ悪いで！」
次は妹
「みゆうちゃんにはかんけいがないことやん
ほつといてよ！」
言ったな！
こつちも負けへんで！
「かんけいなくないやん」
「はい」
やった！わたしのかちだ！
でも けんかもするけど
妹がこまっっているときにたすけちやう
なぜだろう？ふしぎだなあ
第二し合は学校からかえってきたら
こんどの先こうは妹だ
「なんで台ふきなあかんのよ」
「べつにいいやん」
みゆう いそがしいんやから」

「はい」
しかたなさそうにへんじをする妹
でも その顔 わたしはすきだな
二回せんも やっぱりわたしのかち
明日も勝つぞ！



入選

走る

城南小学校 4年

西堀 有咲

わたしの手にバトンがわたった
むがむ中で走った
何も聞こえない
その時
ダッダッダッダッダッ！
後ろから足音が近づいてきた
ダダダダッ！
やばい！ぬかされる！
ぬかされるもんか
わたしは必死で走った
次の人が右手を出して待っている
わたしはがむしやらに走った
バトンをわたした
ハアー
あぶなかった
良かったあ
みんなのおうえんする声が聞こえた
わたしもおうえんした



【小学5年生・6年生】

特 選

私の家族

城西小学校 6年

上田 愛音

私の家族は じまんの家族

私のお母さんは

いつでも私の相談にのってくれる

私のお母さんは 私が良い結果が出せたら

自分の事のように 喜んでくれる

だから次も がんばれる

私のお父さんは 分からない事があれば

どれだけでも 教えてくれる

私のお父さんは 遠くに行く時

いつも運転してくれる

だから私が運転出来る ようになったら

一番に乗せて あげるんだ

私の妹は おっちょこちよいで

おどかすと すぐにたおれる

私の妹は 私を見つけると

いつでもだきつく

だから私は 私なりに お姉ちゃんをしてる

だから私の 家族はじまんの家族です

(評)

素敵なご家族の笑顔がうかんできます。“私は私なりに お姉ちゃんをしている”作者の器量の良さや、お母さん・お父さんの一つ一つの心優しい行動も上手に表現されて、ほのぼのの感も伝わってくる作品です。子供の貧困などがニュースになる昨今、この作品の様に自慢の家族がもっと増えていきますように。

(彦根文芸協会 やまかみ まさよ)



準特選

手紙

城東小学校 6年

高尾 真以

手紙は 書いた人の気持ちだ

うれしい気持ち 楽しい気持ち

喜ぶ気持ち 感謝の気持ち

誰かを想う 優しい気持ち

手紙は 温かい心でできている

手紙は 書いた人の心だ

その手紙は ドキドキ ワクワク

いろんな心で

心をはこぶ

そして その心の受け取り人が

手紙を開けると

温かい ピンク色の優しい心が

あふれ出す

心でいっぱいになった手紙が

心と心を つないでいる

(評)

この詩に初めて出会った時、きれいな文字で原稿用紙にきちんと書かれてあって、ひと目見て書く事の好きな作者だと判りました。

相手に思いを届ける時、メールやライン・ツイッターなどで済ませてしまう今の時代に改めて心を伝える手立てとして、手紙を書く事の大切さを教えられた作品です。

(彦根文芸協会 やまかみ まさよ)



佳作

自転車

城南小学校5年

幸重 季空

自転車に乗れなかった
でも 別に
乗れなくてもいいと思っていた

先生や友達が

ぼくに教えると言ってくれた時

ちよつとビックリしたけれど

それ以上に乗れるかも!という

嬉しさが大きかった

練習が始まると

こわくて何度も自転車をたおしたり

こけそうになっただけ

支えてくれたおかげで

自転車に乗る事ができるようになってきた

そしたら見慣れた学校の景色や空気が

キラキラしている

顔にあたる風が

おどる様にぼくのほおをなでたり

髪の間をすり抜けていく

地面を踏みしめ歩く足を

ペダルに乗せると

まるで空中散歩をしているようだ

自転車に乗れて良かった

違う世界が見えてうれしかった

教えてくれてありがとう

自転車ってステキだね

乗れるってステキだね



私の夢と妹

城東小学校 6年

岡本 世翔

私の夢は保育士
私は小さい子が昔から好き
私の家族は
私を合わせて五人
私は次女
私には妹がいる
私は妹のめんどうを見ていたんだって
私のこの夢は 三年生から
それまで私は
夢がころころかわってた
でも今は
一つの夢に向かってく
妹が産まれてきたおかげで
私は夢を持てた
ありがとう
ありがとう
産まれてきてくれてありがとう
私は保育士という夢に向かって
一直線に進んでく
夢に向かって進んでく
私は今夢への第一歩を
踏み出そうとしている

私のお母さん

城西小学校 5年

小川 朋子

私はお母さんが好き
ときにはしかつてくれる
ときにはほめてくれる
いつだって私のこと思ってくれて
いつだって私のこと見守っていてくれて
そんなお母さんが私は好き
だけど私が家族に反発した時
お母さんはだれよりもおこる
おにのような顔をして
私に向かってかみなりをおとす
だけど私はそんなお母さんも好き
とても感謝している
私にとってお母さんは
かけがえのないそんざいだ
私は本当にお母さんが大好きだ

金曜の夜だけの手伝い

城南小学校 6年

岡田 みのり

金曜の夜だけの手伝い
「夕飯作り」
今回は肉じゃが
弟といっしょに作る
はじめてじゃがいもの皮を
包丁でむいた
こわかった
でも
ちゃんと切れた
苦心して作った
二人で作った肉じゃが
「おいしい」と
お母さんは笑顔で
言ってくれた
次は何をつくろう
また
お母さんの
「おいしい」
が聞きたい

入選

華

平田小学校6年

坂田 あすか

今日 私の家に犬が来た
「かわいいね」
「名前はどうしようか」
「女の子で 黒柴だから 黒鈴がいいよ」
みんなでわいわい話す
名の無い私の家族になつたばかりの犬は
不思議そうにこちらをみつめる
「いやいや やっぱりはなにしよう」
「賛成！」
犬はいや はなは何かを感じたのか
「キャンキャン！」とよるこんでいた
「そうか はなもうれしいか」
「ねえ 漢字をつけようよ 私は華がいい」
私がいようとみなが理由を聞いてきた
「だって花じゃいっばいいるじゃん？だからあ
んまりいないしきれいだから華にしよう」
なるほど とみんながうなづく
「そうね じゃあそうしよう」
「今日からこの子は華だ」
今日 私の家族に華が加わった

入選

心と私

城東小学校6年

三須 麻友香

人はどうしても
調子にのると悪い事をしてしまう
人はどうしても
うれしい事があるとじまんしてしまう
こんな言葉がときに
人の心につきささることがある
人はときどき
他人の笑顔が見たくなる
人はときどき
何かの形で自分の気持ちを伝えたくなる
こんな少しの行動でときに
人の心が明るくなる時がある
私たちは人の心を傷つける事ができる
深い深い傷をつくる事ができる
ときに人の心を笑顔にする事ができる
はじけるくらいハッピーにする事ができる
私たちは自由自在に心を動かす事ができる
そんな心を大切にしたい

入選

海

城東小学校6年

大久保 翔馬

いつも必ずそこにいて
いつも静かに笑っている
子供が来たら一緒に遊び
老人来れば散歩する
暑い時には暑すぎて
寒い時には凍えたり
嵐が来たら大きくうなる
だけど次の日見てみれば
昨日の事がなかったように
また静かに笑っている
いつも必ずそこにいて
いつまでもぼくらの友達だ
友達の名は海という

【中学生】

特選

14才 僕

彦根中学校2年

中村 美磨

だから 楽しいと思つた
 だから ちよつとしんどかつた
 だから うれしいと思つた
 だから 苦しいと感じた
 だから がんばろうと思つた
 だから

出会えてよかつたと
 僕は思っている

そして 氣付いた
 そして 強がつてみた
 そして ふり返つた
 そして 笑つた
 そして 確信した
 そして
 出会えてよかつたと
 僕はうなづく

(評)

詩を軽やかに書きつつ内容を深く豊かにすることはなかなか難しい。この作品では、14才の僕の気持ちに素直に語られながら、行の構成や省略、接続詞の使い方などが巧みで、リズム感の良い詩に仕上がっている。

(彦根文芸協会 尾崎 与里子)



準特選

無題

鳥居本養護学校 中等部1年

中川 甘苺

目の先に走る鉄のかたまり
 中には子づれの家族 学生
 ふと 目を閉じる
 変に むさくるしいこの建物を出て
 右 右 まっすぐ 左 右・・・駅に着く
 誰もいないホームに一人
 一人で聞くには少しうるさいあのかたまりの音
 ゆっくり乗り込む
 イマドキの服装で音楽を聴いている若い女の人
 と
 ボンヤリ遠くを見つめるご老人三人
 そして 私
 このまま遠く遠く遠く・・・
 最後の駅に黄金色にかがやく先の見えない花畑
 少し歩いたところに小川とベッドがある
 ここでは おなかは常に満たされ
 ここちよい風が吹いている
 目を開ける
 そこはまた変にむさくるしい建物のベランダ
 短く重たいため息を一つ
 そして 今日私は今を生きる

(評)

「視える」ということを、体の感覚として深く問い直すように書き進められていく。ありふれた光景を、人の根源的な部分に直接触れるようにたどりながら描かれる世界は、人生の不条理をすでに経験した大人のような悲哀すら感じさせる。

(彦根文芸協会 尾崎 与里子)



佳作

冬の吹奏楽ホールのお客さんに
感動が届けられるかな？

西中学校2年

酒井 来夢

冬の音楽室はめっちゃ寒い
その寒いへやで私たちの
音楽が鳴り響く
聞きに来てくれるお客さんに
感動が届けられるのかな？
雪の日も私達吹奏楽は
寒い中聞きに来てくださる人達に
暖かな音楽が届けられるように
練習を頑張るしかない
ホールという大きな舞台の袖から
入場をして音楽が始まる
そこからの音楽は暖かい
冬とはおもえないくらい
とても暖かな演奏が響きわたった
これからもこの暖かな演奏が聞けるかな？
冬の寒い日にはやっぱり暖かい演奏が聞ける日
が来るまでに
もっと吹奏楽の事を知ろう!!
冬はやっぱり音楽だね！

冬の吹奏楽はホールに響いて
お客さんに感動が届けられたよね？

楽しかった音楽ももうそろそろおわる
最後の時間をみんな楽しんでもうよ!!

.....
とうとう演奏が終わった
みんな笑顔でおえてよかった



正義

西中学校 3年

下村 陸斗

正義ってなんだろう
悪ってなんだろう

自分達の思う正義は本当に正しいのか
もしかしたらまちがっているのではないか
自分達は悪なんじゃないだろうか

誰もその答えを探そうとしない
自分の正義が信じれなくなるからだ
今まで頼ってきた正義を失いたくないからだ

正義はいつでもそばにいる

正義は自分の言動の言い訳にすぎない

正義と悪は反対の意味ではない

悪も自分の正義を言い訳に生きているからだ

どの正義が正しいかなんて誰も分からない
それでも自分達は正義を背負って生きていく
それが自分らしく生きる唯一の方法だから



【総評】

小学低学年では、くらしの中で見つけたこと・感じたこと・思ったことが、そのままの自分だけのすなおな言葉で表わせていました。

中学年のみなさんは、その上に、さらに、夢をふくらませながら、思いも深め、自分の世界が表現されていて心を打たれました。

高学年になると、つい考え過ぎて、よい言葉で詩を整えようとしませんが、自分の内面の思いをつむぎ出して、自分にしか描けないような心の世界や言葉を見つけてほしいと思います。

中学生の応募は数が多くなってきたことだけでなく、内容の水準も格段に上がってきていて嬉しいことです。心身ともに大きく変化する中学生ならではの悩みや苦しみ、そして希望を率直に言葉にすることで、物事を客観的に視る力が養われ、心の成長につながっていきます。今回は内容の深さに加えて、詩をいきいきさせるリズム感や繰り返し効果、言葉の選択などの手法もよく考えられた良い作品に出会えました。

(彦根文芸協会 谷口 明美)

(彦根文芸協会 尾崎 与理子)

